

北野昭彦著

『国木田独歩の文学』

山田博光

本書は十一章からなるが、未発表の一部の章を除き、大部分はすでに独立の論文として「立命館文学」「論究日本文学」「日本文学」などの雑誌に発表され、その都度学界の注目を浴びた論稿である。私も以前に国木田独歩研究の戦後の発展に触れ、ともすれば伝記研究にかたよりがちな中であって、独歩の文学と思想そのものに正面から迫る著者の態度を称揚したことがある。このたび十年來の労作をまとめられた機会に通読し、その感を一層強くした。

独歩研究史上最初の本格的な著書は坂本浩『国木田独歩』(昭17)であるが、これは評伝である。戦後の小野茂樹『若き日の国木田独歩』(昭34)、谷林博『青年時代の国木田独歩』(昭45)、桑原伸一『国木田独歩―山口時代の研究―』(昭47)はいずれも労作であるが、それぞれ佐伯時代、山口県在住時代を綿密に調査した評伝である。益田道三『国木田独歩』(昭23)は、比較文学の視野からのみ独歩の文学に照明を与えたものである。このように見てくると、従來の独歩研究書は評伝と特殊な角度からのもののみで、独歩の

文学と思想を正面きって論じた研究書が一冊もなかったと言える。したがって、本書は独歩文学についての最初の本格的な研究書であると言っても過言ではない。

私はこの文の冒頭で、雑誌に発表された独立の論文を集めたもの、と本書の成立を説明したが、それだけだと誤解される恐れがある。すなわち、論文集だと早のみこみされる危険である。この書は決して論文集ではない。一章から十一章まで有機的に展開されたまことに見事な書きおろしの独歩文学論と言ってもよい。強いて言えば、一、二、三、六の四章は原理編、すなわち独歩の思想構造の核心を分析した章であり、それ以外の七章は原理編に基づいて作品を分析した応用編である。

一貫して三つの特徴が指摘できる。一つは独歩の精神の二面性を常に統一的にとらえようとしていること。芥川以来、独歩の魂は天と地にすなわち理想と現実にはきざされた悲劇的な存在として把握されてきたが、それを矛盾としてではなく統一的にとらえようとしていること。第二に、従來の定説は独歩の文学を三期にわけて、浪漫主義から自然主義ないし現実主義への発展としてとらえているのに対し、著者は根本から言えば独歩は変わらなかつたという説を堅持している。そして独歩の思想は明治二五年から二六年にかけて、すなわち「社会と人」(『独歩遺文』所収)「欺かざるの記」の初期にその根本が形成されたと思なし、くり返しここに立ち返って独歩の思想構造が分析されている。それと関係あることだが、著者の関心は従來の定説の一期と二期の作品、すな

わち短編集で言えば『武蔵野』『独歩集』『運命』にしばらくられ、第三期すなわち『独歩集第二』に代表される自然主義期には及んでいない。第三に、著者は伝記的研究・比較文学的研究には意識的に禁欲的で、必要最小限のことにしか触れていない。そして、第一と第二の特徴が本書の独創性の源泉となっており、第三の特徴は著者のとった方法の必然から来たもので、本書の性格を決定づけると同時に、ささいな点ではあるが弱点のみなもととなっている。

以上の点を前提におきながら、以下各章を細かく見ていこう。

第一章は、『理想の事業』から『小民史』の文学的展開へ」というタイトルになっている。著者は独歩の作品を、①理想を主体的に追求する創造的少数者の人生や運命を描いたもの、②いわゆる「小民」すなわち無名の民衆を描いたもの、の二つに分けている。独歩が「民衆の詩人」であり、「小民」の文学者だということは従来から言われていることであり、珍しくないが、①の分類は著者の新説である。①はさらに「不羈、独立、自由」の理想を追求する人間像と人間的実存の世界に常住しようとする人間像の二つに分けられ、前者に「帰去来」「空知川の岸辺」「日の出」、後者に「忘れえぬ人々」「牛肉と馬鈴薯」「神の子」「悪魔」「号外」を当てている。後者は従来「哲学小説（益田道三）」とか「思想告白小説」とか呼ばれた系列である。私の見るところでは「号外」は余計者の知識人を多少諷刺的に描いた作品ととれるので、ここに加えるのには一考を要する。また、「忘れえぬ人々」は著者の

言葉を借用すれば、「小民」と「理想を主体的に追求する創造的少数者」とのかかわりを描いた作品であるから、①と②の両方に入れるべきではないか。

著者はついで独歩が現実の中で「理想の事業」を追い求めて挫折し、「小民」たちに連帯を求めていった経過を分析している。

その「理想の事業」とは「社会的」〔名〕と「利」の追求」とたか、社会を導くことである。この問題は第二章、『個人感』対『社会感』の思想構造」でさらに詳しく分析されている。従来から指摘されているように、独歩にはシンセリテイ・個人感・天地生存と、社会感・社会生存を対立させ、前者を肯定し後者を否定する考え方が存在する。この構造を分析して、著者はいくつものすぐれた指摘をしている。第一に、「独歩は『社会感』を敵視するが、それは現実逃避とははつきり別物である。逆にむしろ現実変革への積極的な志向ですらあった」という指摘。第二に、独歩の用語を細かく見、独歩が「社会」と「社会的」を使いわけ、独歩が敵としているのは「社会的」の方であるという指摘。第三に、「個人感」と「社会感」を矛盾した要素としてではなく、統一的に把握していること。すなわち、独歩が少なくとも出発期には「自ら理想に立ちつついかにして社会に住むべきか」を自己の課題にしていたが、のちには「いかにして自ら理想に立つか」に精神を集中したあまりに「いかにして社会に住むべきか」の課題が忘れられがちになったという指摘。いずれもオリジナルで説得的である。ついで著者は「空知川の岸辺」の人間像を高く評価し、ここには

「不羈、独立、自由」の生活、「社会生存」の現実的姿、「天地生存」の理想、「天真の人情」に生きる「小民」像、という独歩の志向のすべての面が統一的に描かれているとしている。それに反し、他の作品はどれかに片寄っているか、「個人感」と「社会感」が並列的に描かれているうらみがあるとしている。

第三章は「『驚異』を持續させた主体と志向」のタイトルで、「牛肉と馬鈴薯」の主題をなす「驚異心」の分析である。これは、シンセリティ・個人感・天地生存の感・驚異心のように言いかえられたが、根本的には同一のものであること。驚異心は独歩にとって宗教や文学の基礎をなす感情であること。シンセリティ・驚異心と「人情の幽音悲調」とのかかわり。そして独歩の心に驚異の念がよみがえるのは、自然と直接相対したのち人間社会に投じた時であることを分析している。

四章以下は具体的な作品論となっている。四章では「婦去来」をとりあげ、新しい照明を投げかけている。私もかつて「婦省小説」の一つとしてとりあげたことがあったが、著者のような積極的な評価は最初のものである。著者はこの作品を、『山林の自由の生活』という理想が、地上現実の世界に成り立つ可能性の有無を追求した唯一の作品』として注目している。しかも「婦去来」の成立の由来を、独歩が友人に宛てた書簡の一節「余は有体に言へば恒産ありて山林に一良民として過し得れば足るが如し。余に恒産なし」の条件をつくりかえて、「恒産がある」主人公が田園に理想生活を建設しようとするテーマの追求においては、新見

であり、ハッとさせられた。しかし、著者によれば「婦去来」の主人公の試みは、農村の封建的な体質とぶつかって挫折した。「婦去来」のタイプの小説は以後ほとんどなく、わずかに「空知川の岸辺」がこの系統をうけつぐものであるとされている。

第五章の「『武蔵野』に象徴された作家精神の立脚点」は、「武蔵野」の自然文学としての新しさを分析するより、このような作品を生み出した独歩の思想構造を問題にしている。私は単純に独歩が明治の社会から出て行って新しい自然を発見したと考えていたが、著者は独歩が社会から自然に出て行き、再び社会へ戻ろうとしたところにこの作品が成立したとしている。自然から「人寰」へ帰還しようとして、自然と生活との接点すなわち町はずれにとどまった精神が生み出した作品だといっているのである。大変斬新な説である。ただ私は、「空知川の岸辺」を自然の冷厳さにたじろいで「人寰」をなつかしがる精神の生み出した作品と考えているので少しばかり著者と意見を異にする。

第七章は「春の鳥」論である。表題は「『白痴讚美』のロマンチズムと『春の鳥』」となっているけれども、著者の真意は「春の鳥」が「白痴讚美」のロマンチズムの作品であるという通説を打ち破る点にある。そして著者は、「春の鳥」が「白痴讚美」ではなく「少年讚美」の作品であること、話し手の「私」は独歩の「詩魂」を示すこと、人間の生まれながらの魂は善であるのに社会がそれをねじまげるといふルソー以来の人間観の影響を受けていること、などを指摘している。私はこの説には全面的に賛意

を表したい。

第八章、「『少年もの』と『教師もの』の人間観的基盤」は、独歩の中期に多い少年小説と、教師を主人公とした小説（『日の出』『酒中日記』『富岡先生』）とのかかわりを論じたものである。少年ものの根底に、独歩が少年を「純粹無欠」な「本善の種霊」を損われない存在」と見るのに対し、大人を「過去からの因習や旧態依然の価値観」に支配される「墮落」した存在と見る人間観があることを指摘している。そのような少年を正しく導く教師像を追求したものの（『日の出』）、正しく導けない教育界の病根を鋭くついたもの（『富岡先生』『酒中日記』）が、独歩の教師ものであると著者は言っている。

第九章は、教師ものの一つ「酒中日記」の作品世界の構造を分析したものである。そしてこの作品が、『馬島』を対照の基準にして『東京』の現実が批判されている「作品」としている。東京の現実には日清戦争後の軍国化が進み、真面目な教師が生きられない世界である。それに対し、馬島は理想境ではない。都会から遠いがために軍国主義の腐敗、墮落から免れている「山林海浜の小民」の世界、近代以前の人情に厚い世界である。しかし、「馬島」も都会よりまだましな世界だけであって、無条件に肯定できないというのが著者の意見である。

第十章、「『非凡なる凡人』の系譜」と第十一章、「『運命論』の生成過程と近代の運命劇の創造」は、それぞれ独歩の運命観の二面性を分析したものである。前者は、『日の出』『非凡なる凡人』

人』『馬上の友』のような昇期の市民社会に特有な明るい肯定的な作品群」を分析したものであり、後者は『酒中日記』『運命論者』『悪魔』『正直者』『女難』のような、暗い宿命的な作品群」を分析したものである。著者の独自性はその両群をバラバラのものと考えずに、あくまで「聯絡を求め、そこに生ける生命の一貫して現われているところをたど」ろうとした点にある。この二章も教えられるところが多かった。

以上私は、短い六章を省略したほかは各章の論点を紹介してきた。いずれも独歩の思想と文学の核心に触れたものである。そして各章の末尾に添えてある詳細な注に象徴されるように、著者は先行文献によく目を通し、それを消化して自己の論旨を展開するという、手堅い学問的方法を取っている。しかも、著者にはまれに見る強靱な論理的思索力があり、首尾一貫して自己の独歩観を通して見ている。それは理想を追求する独歩と現実にかかわろうとする独歩との統一的把握という観点である。そしてそれは見事に成功している。

以下は蛇足のようなものであるが、二、三私の疑問ないしは要望をつけ加えておきたい。第一は、「天地生存の感」または「驚異心」を独歩の「理想」と言えるかという疑問である。独歩自身「牛肉と馬鈴薯」でそれを現実派と理想派のどちらでもないと言っている。私も独歩の言うとおりだと思う。私はそれを「実存の自覚」と解釈している。「実存の自覚」は理想主義ではない。著者も、第一章の冒頭のところで、このところを「人間の実存、な

いし詩人的実存の世界に常住しようとする人間の内面を描いたもの」(「牛肉と馬鈴薯」他)としているので、実存の自覚としてとらえていると思つたが、その後の展開ではやはり理想と結びつけている。驚異心は理想や社会とのきずなを捨てて、ここにあるわれを驚きとともに自覚することではないだろうか。

第二に、「社会と人」の文献学的処理の問題である。著者は独歩の思想構造を分析する鍵としてくり返し「欺かざるの記」と「社会と人」を使っている。これを重要視する点においては私も異論がない。しかし、まず「社会と人」が独歩のいつのものか明らかにする必要がある。これは『独歩遺文』初出のものであるが、初出にはとどころに明治二五年一月何日という付記がある。ただし、これはどうしたことか学研版全集では削られている。しかし、明治二五年後半の書簡と比べてみると、段落の冒頭には必ず〇印をつけるなどいくつかの表記法の特徴から、同じ時期のものだと判断できる。次に「社会と人」は独歩の思索のメモであると同時に、当時独歩が読みつつあったカーライル「英雄崇拜論」、バイブル、「ワーズワース詩集」などからの書き抜きの性格も持

つ。したがって、どこまでが独歩自身の地の文で、どれが引用文か確認する必要がある。そのことは独歩の思想のオリジナリティにかかわる問題だからである。

第三は、第二の問題とかかわることであるが、たとえば八章の「少年もの」の分析で、「少年賛美」の思想は、ワーズワースの「子供は大人の父である」に代表される思想に由来することをもっとつこんで指摘する必要があるとはいえないか。益田道三氏のように独歩の思想をすべてワーズワースやカーライルに解消してしまふのは行きすぎだが、そうかと言って独歩の思想の源泉となつたものを明らかにする必要がある。「驚異心」とカーライルの場合、「空知川の岸辺」の「自然の冷厳さ」とツルゲーネフ「深林の逍遙」の場合も同様である。

以上はまったくつまらぬものねだりであって、評者自身もやりたい夢を語っているのだと解釈してご寛恕ねがいたい。

(昭和四十九年九月、桜楓社刊)
(やまだ・ひろみつ 帝塚山学院大学教授)